

製品名: MOR-1 (リン酸化 Ser375) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab05036**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください (12 ヶ月有効)。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:10000-1:20000
分子量	45kDa

抗原情報

遺伝子名	OPRM1
別名	OPRM1; MOR1; Mu-type opioid receptor; M-OR-1; MOR-1; Mu opiate receptor; Mu opioid receptor; MOP; hMOP
遺伝子 ID	4988.0
SwissProt ID	P35372
免疫原	抗血清は、ヒトオピオイド受容体の Ser375 のリン酸化部位付近の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 341-390

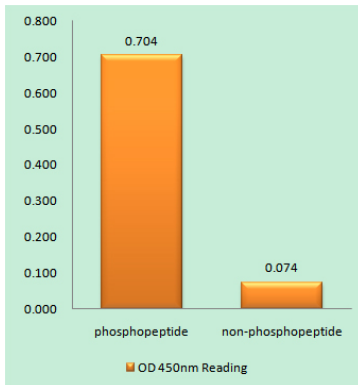
背景

この遺伝子は、ヒトの少なくとも3つのオピオイド受容体の1つ、 μ オピオイド受容体 (MOR) をコードしています。MORは、 β -エンドルフィンやエンケファリンなどの内因性オピオイドペプチドやオピオイド鎮痛剤の主な標的ですが、MORはまた、ドーパミン系の調節を介して、ニコチン、コカイン、アルコールなどの他の乱用薬物への依存にも重要な役割を果たしています。NM_001008503.2:c.118A>G アレルは、オピオイドおよびアルコール依存症、ならびに疼痛感受性の変動と関連付けられていますが、原因となる役割を持つという証拠は矛盾しています。この遺伝子には、異なるアイソフォームをコードする複数の転写バリエーションが見つっています。標準的な MOR は7つの膜貫通型 G タンパク質共役受容体のスーパーファミリーに属しますが、この遺伝子の一部のアイソフォームは膜貫通ドメインを6つしか持ちません。[RefSeq 提供、2013年10月]機能: カルシウムイオン電流を減少させ、カリウムイオンコンダクタンスを増加させることで神経伝達物質の放出を阻害する。 β -エンドルフィンの受容体。、オンライン情報: μ オピオイド受容体エントリ,多型: バリエーション Asp-40 は、試験したほとんどのオピオイドペプチドおよびアルカロイドに対する結合親和性の変化を示さないが、 μ オピオイド受容体を活性化する内因性オピオイドである β -エンドルフィンとは、最も一般的な対立遺伝子型よりも約3倍強く結合する。、類似性: G タンパク質共役受容体1ファミリーに属する。、サブユニット: G(alpha)z/i2 サブユニットおよび RGSZ タンパク質、RGSZ17 および RGSZ20 と複合体を形成する。この複合体の形成は、 μ オピオイド受容体の脱感作をもたらす。RGSZ17 および RGSZ20 と相互作用します。

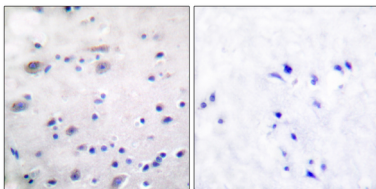
研究分野

神経活性リガンド-受容体相互作用;

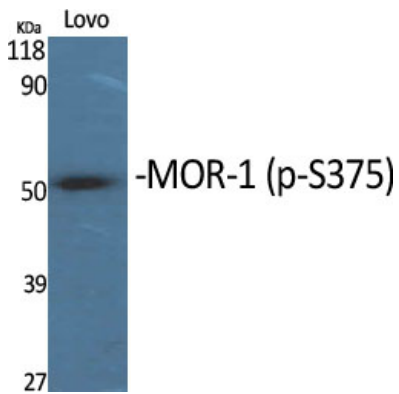
画像データ



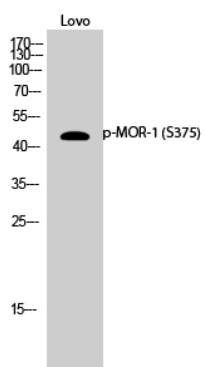
オピオイド受容体 (リン酸化 Ser375) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



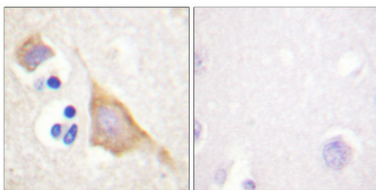
オピオイド受容体 (リン酸化 Ser375) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。



リン酸化 MOR-1 (S375) ポリクローナル抗体を用いた様々な細胞のウェスタンブロット解析



リン酸化 MOR-1 (S375) ポリクローナル抗体を用いた Lovo 細胞のウェスタンブロット解析



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。